

柳田邦男先生から

絵本大賞入選者へのメッセージ

はじめに 総評

この柳田邦男絵本大賞を始めてから、今回ではや十一回目になる。平成二十年の第一回ときは、寄せられたおたよりが、子どもの部と一般の部を合わせて約三百八十通でした。

絵本は子ども心の発達に大きな影響を与える特別なメディアですし、親が子どもと一緒に絵本を読んだり読み聞かせをしたりすると、子どもの反応から、親が子ども感性のすばらしさに気づかされたり、親自身が心の持ち方や生き方につ

いて学んだりすることが少なくありません。

そこで、どの家庭でも、親も子も毎日絵本を読むようにする「家庭の絵本文化」を荒川区内に定着させようというねらいで、絵本を読んで感動したり何かだいじなことに気づいたりしたら、「柳田さんにおたよりを書こう」という呼びかけを始めたのです。すばらしいおたよりには、賞を差し上げることにしました。

最初の年は、この活動の趣旨がまだ区内の小中学校や一般家庭に十分に伝わっていませんでしたが、それでも約三百八十通ものおたよりが寄せられ、すばらしい内容のおたよりが少なくなかったのです。

その後、毎年夏休み前後の期間に呼びかけると、おたよりの数は年ごとに増え続け、最近では、毎

年一千通を超えるほどになっています。全国の区市町村で、これほどまでに地域内で「家庭の絵本文化」が広まっているところは、荒川区以外にありません。

今回のおたよりの内容を見ますと、子どもの部では、大賞の草柳祐美子さんがおたよりに書いているように、絵本『教室はまちがうところだ』を読んだことで、引っこみ思案で発言しないよりは、まちがっても自分の考えを言うようにしたほうが、正しい知識をしっかりと身につけるうえで有効であるばかりか、正しい知識をみんなが覚えるためにもよいということまで気づいているのです。

また、優秀賞の園田遥香さんや佐藤花音さんは、いのちのかけがえのなさやいのちのつながりに

気づくことによって、自分のいのちを大切にしていけるようになり、一杯生きなければいけないのだと考えるようになったと、すばらしい気づきについておたよりに書いてくださった。

一方、一般の部では、大賞の森奈津子さんのおたよりに代表されるように、親子三代にわたって絵本の読み聞かせが伝承されていることを具体的に記すことで、「家族の絵本文化」の大切さを強調しているなど、「家族の絵本文化」を語るおたよりが多く見られました。

今年も、子どもたちと大人たちが、絵本による様々な気づきと心の成長の体験をおたよりに綴ってくださいました。千二百四十四人の方々に心からの感謝を申し上げます。